

大学生における居場所感を規定する要因に関する研究

今 林 俊 一*・迫 田 一 城**

(2018年10月23日 受理)

Determinants of a “sense of *ibasho*” among university students

IMABAYASHI Shunichi, SAKODA Kazushiro

要約

青年期における心理的な居場所に関する研究が近年多く行われている。迫田・今林（2017）は、大学生の生活ストレスと学校適応感との関連について心理的居場所感の観点から調査研究を行い、その結果、友人に対する心理的居場所感が高ければ、学校適応感は低くなりにくいということが示唆されている。本研究では、PAC分析を通して大学生の友人関係における居場所を規定する要因について事例検討を行った。その結果、居場所の規定要因として、同性の友人に対して居場所を感じやすいこと、被験者と友人の間に信頼関係が築かれていることが促進要因として示された。また、居場所の阻害要因として、友人と共有できる情報や体験の有無（差異）が挙げられた。今後の課題として、本研究で見いだされた結果を基に多人数を対象とした調査研究を行う必要がある。

キーワード：居場所感, PAC分析, 大学生

* 鹿児島大学 法文教育学域 教育学系 教授

** 鹿児島大学大学院 教育学研究科 院生

問題・目的

青年期を対象とした居場所に関する研究が近年多く行われている。居場所は物理的空間を意味する言葉だけでなく、心理的な意味を含む言葉としても扱われるようになってきている。則定(2016)は居場所を「こころの拠り所となる関係性、および、安心感があり、ありのままの自分が受容される場」と定義している。北山(1993)は青年期を「社会的な要素の多い移行の時期、期間」と述べており、特に急激な移行が個人においてなされるときには、居場所が失われやすいと述べている。また、富永・北山(2003)は、青年期においては他者からの自己の分立が重要になるが故に居場所の持ちづらさがあり、だからこそ居場所が保証されることが重要であると指摘している。これらの知見から、中藤(2011)は、青年期は思春期から成人への移行の段階であり、個人にとってこれまで生きてきた過去と、これから生きようとする将来が、特に社会的な要素を伴って交錯し、ときに自己の混乱をきたすような危険を孕んだ段階であると述べており、個人のその過程を支える拠り所として居場所の存在が重要であると示した。このように、青年期における居場所は個人の適応を考える上で重要な視点であるといえよう。

居場所についての研究には、どこを居場所とし、どのような心理面があるかについて実態把握を目的とする研究や自由記述や面接法による質的研究の他、尺度作成や尺度を使って多人数からデータを収集し、統計的に分析する量的研究がある。居場所に関する量的研究の一つとして則定(2016)は心理的居場所感尺度を作成し、下位尺度を本来感(例:〇〇と一緒にいると、ありのままの自分を表現できる)、役割感(例:〇〇から頼りにされている)、被受容感(例:〇〇はいつでも私を受け入れている)、安心感(例:〇〇と一緒にいるとホッとする)の4つに分けられることを明らかにしている。迫田・今林(2017)は、則定(2016)の心理的居場所感尺度を用いて大学生の大学生活ストレスと学校適応感との関連について調査研究を行った。その結果、大学生活に対してストレスを感じていたとしても友人に対する心理的居場所感が高ければ、学校適応感は低くなりにくいということが示唆された。課題として大学生の友人に対する心理的居場所感を高める要因について検討することが挙げられた。

一方、質的研究としては、小沢(1998)が居場所を基本的に自分と他者と対象の三角形を成しているものとして研究を行っている。具体的には居場所グラムという手法で、自分を中心に図式化した大学生の事例を示している。そこでは、肯定的な心理面だけでなく葛藤のある居場所もあげられている。また、小畑・伊藤(2001)は高校生と大学生を対象に自由記述を用いて、心の居場所はどこか、そこで感じる感情、行動、意味について尋ねている。特に居場所の感情について、「安心、安らぎ、気楽」や「がんばる、前向き」という肯定的な心理面に加えて、「面白くない、全く落ち着くわけではない」という否定的な感情があることも示している。さらに、居場所の意味について、自己反省も挙げられることを指摘している。これらの2つの質的研究の特徴として居場所に対して肯定的な感情だけでなく否定的な感情、または葛藤状態を含む感

情を持っていることが挙げられる。これは面接や自由記述などで被験者の居場所についてのイメージや感情についてより詳しく調査することができたことによって得られた結果であると考えられる。なお、小沢(1998)は居場所の変遷について自由記述と面接法を用いて調査を行い、小畑・伊藤(2001)は自由記述のみで調査を行っている。

ところで、特定のテーマに関する認知やイメージ、感情について測定するための分析方法の一つにPAC分析がある。PACは、Personal Attitude Construct(個人別態度構造)の略称で、テーマの認知やイメージの構造、心理的場、アンビバレンツ、コンプレックスまで測定できるように内藤(1993)によって開発されたものである。この分析方法は、当該テーマに関する自由連想(アクセス)、連想項目間の類似度評定、類似度距離行列によるクラスター分析、被験者によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、実験者による総合的解釈を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を分析する方法である。

そこで本研究では、このPAC分析を用いて迫田・今林(2017)で挙げられた課題である友人に対する心理的居場所感を高める要因について質的に検討を行うことを目的とする。

方法

被験者 被験者は、実験の主旨と実験者以外への匿名性が保証されていることを説明され、それに応じたD大学の2年生男性1名、3年生女性1名、4年生女性1名であった。3年生女性とは初対面であり、それ以外の被験者は実験者と顔を合わせたことのある人物である。

手続き 実験はすべて個人別に実験室で実施された。まず、はじめに連想刺激として、以下のように印刷された文章を提示するとともに、口頭で読み上げて教示した。

「あなたが学内に所属する友人(例：学部・学科内、クラブ・サークル活動等)と関わる際の居場所の感じ方についてお聞きます。

- ① 友人との関わりの中で、どのような刺激を受けることによって居場所を感じますか。
- ② 友人に対してどのような場面や状況で居場所を感じますか。
- ③ 友人に対して居場所を感じたとき、どのような行動をしたいと感じたり実際に行動しがちでしょうか。

上記の内容についてポジティブ、ネガティブな内容にかかわらず自由に頭に浮かんできたイメージや言葉をなるべく具体的に、思い浮かんだ順に番号をつけてカードに記入してください。」

ついで、縦約5cm、横約9cmの大きさのカードを40枚程度被験者の前に置き、頭に浮かばなくなるまで自由連想させた。その後、今度は肯定か否定かの方向にかかわりなく重要だと感じられる順にカードを並べ替えさせた。ついで項目間の類似度距離行列を作成するためにランダムに全ての対を選びながら、以下の教示と7段階の評定尺度に基づいて類似度を評定させた。

教示と評定尺度 教示は、下記の教示と評定尺度が印刷された用紙を被験者に提示したまま、「 」の部分をお口頭で読み上げることでなされた。

「あなたが学内に所属する友人（例：学部・学科内、クラブ・サークル活動等に関わる友人）に対して抱く居場所の感覚に関連するものとしてあげたイメージや言葉の組み合わせが言葉の意味ではなく、直感的イメージの上でどの程度似ているかを判断し、その近さの程度を下記の尺度の該当する数字で答えてください。」

- 非常に近い……………1
- かなり近い……………2
- いくぶんか近い……………3
- どちらともいえない……………4
- いくぶんか遠い……………5
- かなり遠い……………6
- 非常に遠い……………7

クラスター分析及び被験者による解釈の方法

上記の類似度評定のうち、同じ項目の組み合わせは得点を0とした。0から7点までの得点を与えることで作成された類似度距離行列に基づき、被験者別にWard法でクラスター分析を行った。クラスター分析で作成したデンドログラムを2部印刷し、1部を被験者に呈示し、もう1部を実験者が見ながら、以下の手順で被験者の解釈や新たに生じたイメージについて質問した。

まず、実験者がデンドログラムを用いてまとまりをもつクラスターとして解釈できそうな群を作るように被験者に指示した。群の作成の後、その群の意味する内容の解釈について質問し、これをすべての群において繰り返し質問した。その後、第1群と第2群、第1群と第3群、第2群と第3群…というようにクラスター間を比較させて群同士のイメージや解釈の同じ、または似ている点、異なる点を報告させた。続いて、各連想項目単独でのイメージがプラス、マイナス、どちらともいえない(0)のいずれに該当するかを回答させた。最後に実験者として解釈しにくい個々の項目を取り上げて、個別のイメージや併合された理由について補足的に質問した。

結果

各被験者の連想項目およびクラスター分析の結果は、Figure 1からFigure 3のようになった。連想項目数は、最小6から最大17で個人差が見られる数であった。内容に関しては、学内に所属する友人との関係における居場所について、具体的には、居場所を感じる要因や感じたときの行動や状況についての項目という共通点が見られた。しかし、項目の内容の細かい部

分では違いが見られる。本研究では、各被験者の反応や構造を個別に吟味してから共通点や差異点について総合的に解釈する。

被験者 A の事例

被験者 A は、D 大学の 2 年生で、男性である。実験者とは面識があった。連想項目は全部で 17 個で、クラスター分析の結果は Figure 1 のようになった。まず連想項目の中で重要順位の高い順に約 3 分の 1 となる 5 項目を取り上げると、①ウマが合う、②自分の良さを分かってくれる、③自分を高めてくれる、④ありのままで話せる、⑤互いが協力し合える、となる。これらの項目は、被験者が友人との関係についてプラスのイメージとして捉えており、良好な友人関係のなかに居場所があると感じていることを窺わせる。また、その他の連想項目の単独イメージを見てすべてプラスのイメージを持っていたことから、被験者は居場所についてプラスのイメージを強く持っていることが分かる。

以下に被験者自身による構造の解釈を取り上げ、その後、総合的に解釈する。

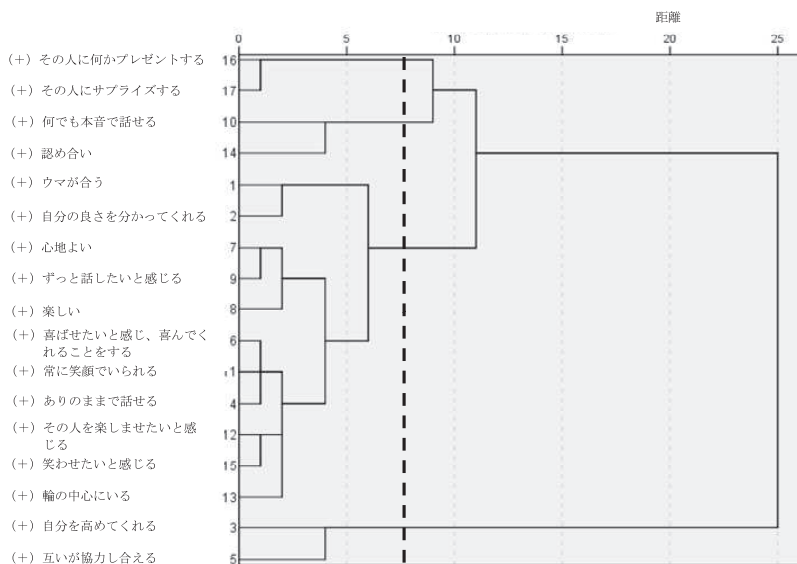


Figure 1 被験者Aの事例についてのデンドログラム

被験者 A によるクラスターの解釈

クラスター 1 は「その人に何かプレゼントする」と「サプライズをする」の 2 つの項目：これは自分がしてあげる行動で、友人全員にプレゼントをするわけではないです。特に特別で居心地がいいなと思った人にします。あまり多用することはないですね。大学の学内にもプレゼントやサプライズをしたいと思える友人はいます。このクラスターに名前をつけるとしたら「与えたい人」で。

クラスター 2 は「なんでも話せる」と「認め合い」の 2 つの項目：ただ友達だとか居心地が

いいとかではなくお互い良いところも悪いところも認め合えている人でないとなんでもは話せないと思います。認め合いというのを詳しく言うと、すべて性格も合っていて阿吽の呼吸っていうか、そういうところも含めてわかってくれる人じゃないとなんでもは話せないですね。この認め合いは学内では男子じゃないとむりですね。女子の友達にそういう認め合いができる人は、今はいないです。クラスターに名前をつけるとしたら「親友」です。

クラスター3は「ウマが合う」「自分の良さを分かってくれている」「心地よい」「ずっと話したいと感じる」「楽しい」「喜ばせたいと感じ、喜んでくれることをする」「ありのままに話せる」「常に笑顔でいられる」「その人を楽しませたいと感じる」「笑わせたいと感じる」「輪の中心にいる」の11項目:上2つのクラスターは1対1のイメージが強いですよ。けど、こっちは、「集団」のイメージが強いというか、そういうイメージですね。「輪の中心にいる」というのは自分だけのことじゃなくて、みんなが輪の中心にいるということですね。一緒にいられる、それこそ居場所的な居心地ですね。自分も入れているという感覚があるとそうなのかなあと思います。けど、たしかに僕はその中でも中心にいたいと思うタチではあるかもしれませんが。クラスターに名前をつけるとしたら「好きなグループ」です。

クラスター4は「自分を高めてくれる」「互いが協力し合える」の2項目:上3つのクラスターは日常生活をしている中で楽しいなとか、いいなあとか思ったりで、こっちは競え合えるというか誰々に負けたくないっていったらライバル感が出ちゃうんですけど、ライバルというより一緒にがんばれるみたいな、そんな感じですね。名前をつけるとしたら「高め合える関係」です。

クラスター同士の比較

クラスター1とクラスター2の比較:「与えたい人」は年下に多く、「親友」は同級生に多いイメージですね。2つとも信頼しているという意味では共通していますね。後輩には与えることはあっても与えられることはあまりないですね。同級生にもおごったりすることはあるんですけど、あまりやりすぎると立場が同等ではなくなる気がするんで控えるときもあります。

クラスター1とクラスター3の比較:信頼していたり、関係の良い人という意味で共通していると思います。違いは個人か集団かだと思います。「好きなグループ」は年上もいれば年下もいるので。なかでもこの人に与えたいとか、この後輩は頼ってくれるから、なかでも特別感があるみたいな、そんな感じですかね。「好きなグループ」のなかに「与えたい人」がいるイメージ。

クラスター1とクラスター4の比較:共通する点は、がんばろうと思うことですね。与えたいためにがんばるとか、負けないようにがんばるとか。違いは親密度かなあ。「高め合える関係」は戦友的な要素があるんですよ。「与えたい人」はただ励まし合う関係で、「高め合える関係」の方が親密度的には大きいです。

クラスター2とクラスター3の比較:同じところは居心地が良いこととお互いが信用しているということですね。違いはまあ、個人か集団かですね。グループのなかでも親密度が高い

か、全体として関わるなかで居心地がいいなと感じるかどうかですね。

クラスター2とクラスター4の比較：共通点はどうか。学内にも高め合える関係はいますし、親友もいます。協力し合ったり、負けないようにがんばろうとか、あっちも頑張ってるから俺もがんばろうとか、そんな感じは2つともあります。

クラスター3とクラスター4の比較：共通しているところは居心地が良くて、良さをわかっている、お互いのいいところをわかっているところですね。違いは個人か集団かですね。

補足質問①：「居場所についてどのようなイメージを持っていたか。」→居場所は基本的にポジティブなイメージが強く、今回もずっとポジティブに考えていた。

補足質問②：「『ウマが合う』という項目があるが具体的にどういう意味か。」→ウマが合うというのは考え方が合うという意味である。

被験者 A についての総合的解釈

クラスター1：このクラスターは友人に対してプレゼントやサプライズをするといった友人に対しての奉仕意欲があると解釈できる。このクラスターのなかでイメージされている友人は主に後輩であった。被験者が後輩に対してプレゼントを送ったり、サプライズ等をすることはあるが、逆に後輩から与えられることはあまりないという発言より、被験者は後輩から尊敬や信頼という社会的資源を得ることによって幸福感ないしは満足感を感じているのではないかと考えられる。この両者の間には互酬性の関係が見られ、このクラスターを「社会的資源の獲得」と命名する。

クラスター2：被験者が「親友」と名付けていたように被験者が居場所と考えている友人のグループのなかでもさらに親密度が高い友人をイメージしたクラスターである。被験者にとっての親友の条件として「なんでも話せる」ことや、「認め合える」ことが挙げられる。また、「なんでも話せる」というのはクラスター3の「ありのまま話せる」と類似している。この違いについては、男子の友人（親友）にしかなんでも話せる存在はいないという発言から、ありのまま話せることは親友においては前提としてあり、そのなかでなんでも話せる、本来の自分をさらけ出すことのできる領域にまで達している存在が親友であると考えられる。そこでクラスター2を「本来感の高い親友」と命名する。

クラスター3：被験者は「好きなグループ」と名付けていた。他のクラスターと比べて項目数が多く、友人の対象として同輩のみでなく後輩、先輩も含む集団であることから幅広い良好な友人関係を意味するクラスターと解釈できる。このクラスターのなかに「友人への無償の奉仕」や「本来感が高い親友」、「高め合える関係」が含まれるという被験者の発言から、被験者の友人における居場所の大枠はクラスター3であると考えられる。このことよりクラスター3は「友人における居場所」と命名する。

クラスター4：被験者は「高め合える関係」と名付けていた。自分を高めてくれる存在や互いに協力し合える存在のことを被験者は「戦友」と表現していた。また、「友人における居場所」

に含まれるとのことから被験者にとっての居場所は、ありのままでいられる感覚を持てる関係性や、後輩に対して奉仕したいと感じ、そのことに役割を感じるような関係性だけでなく、良好な関係でありながら自分を高めてくれるライバルのような関係性も含まれていることが分かる。クラスター4は被験者の言葉も借り、「目標に向けて高め合える戦友」と名付ける。

被験者 B についての事例

被験者 B は、D 大学に所属する 3 年生で女性である。実験者とは初対面だった。連想項目数は 6 項目と少なかったが 1 項目の分量が他の被験者と比べても多かった。重要順上位 3 つは、①自分と考え方が似ている友人と話している時に居場所があると感じる、②友人と一緒にいる時に、自分がわからない、興味があまりない話題が展開され続けると、居場所がないと感じる、③友人と一緒に昼食を食べたり、講義を受けることがあると、居場所があると感じる、であった。これらのことから、居場所に対してプラスとマイナスの両側面のイメージを持っていることがわかった。

以下に被験者自身による構造の解釈を取り上げ、その後で総合的に解釈する。

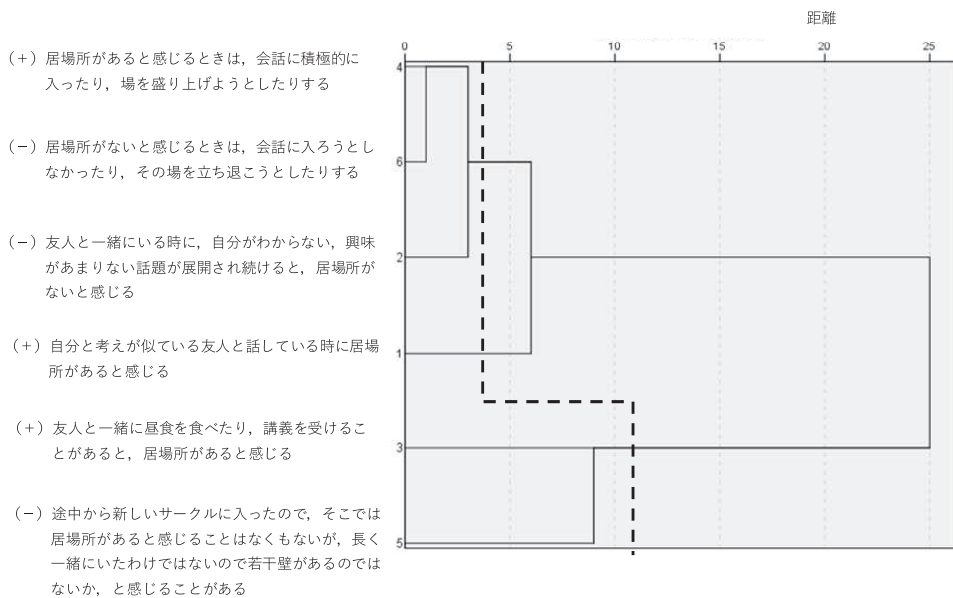


Figure 2 被験者Bの事例についてのデンドログラム

被験者 B によるクラスターごとの解釈

クラスター 1 は「居場所があると感じる時は、会話に積極的に入ったり、場を盛り上げようとしたりする」「居場所がないと感じる時は、会話に入ろうとしなかったり、その場を立ち退こうとしたりする」「友人と一緒に居る時に、自分がわからない、興味があまりない話題

が展開され続けると居場所がないと感じる」の3項目：会話をしている時をイメージしていた。たとえ学科の親しい友人との会話でも、会話の内容がわからない時、興味がないと、居場所がないと感じて帰ったり、別の場所に移ったりすることがある。居場所を感じるときは、自分と共通の趣味を持つ友人と話すとき、友人と会話が合うとき、考え方が合うときに居場所を感じる。

クラスター2は、「自分と考え方が似ている友人と話しているときに居場所があると感じる」の1項目：他のクラスターに比べて重要度が高く、このクラスターに含まれる友人はこれからも付き合っていくだろうと考えている親友と呼べる友人である。クラスター2については基本的にポジティブなイメージを持っている。

クラスター3は「友人と一緒に昼食を食べたり、講義を受けることがあると、居場所があると感じる」「途中から新しいサークルに入ったので、そこでは居場所があると感じることはなくもないが、長く一緒にいたわけではないので若干壁があるのではないかと感じることもある」の2項目：クラスター1とクラスター2は友人との関係性のイメージがあったが、クラスター3は空間のイメージが強い。例えば講義やサークル、昼食の時間等がある。講義では学科の友人と一緒にいることが多い。サークルでは自分が属しているグループがいくつかあり、居場所があるグループとないグループがある。昼食は普段学科の友人と一緒に食べることが多い。

補足質問①：「連想項目はどんな友人を想定したのか。」→連想項目は同性の友人をイメージしたものである。

補足質問②：「異性の友人との関係についてはどう捉えているか。」→異性の友人はいるが普段一緒にいることはない。そのため、居場所の有無はさほど感じないが、どちらかというとプラスのイメージがある。異性の友人と一緒にいるときは、同性の友人と一緒にいるときより楽である。

補足質問③：「居場所についてどのようなイメージを持っていたか。」→居場所についてはこれまであまり考えたことはなかったが、改めて考えると居場所がないときに「居場所がない」と意識することが多いため、ネガティブなイメージがある。しかし、親友的な友人に対しては気が楽であったり、過ごしやすいと感じたりすることもあるため、そういうときに無意識に居場所を感じているのかもしれない。

クラスター同士の比較

クラスター1とクラスター2の比較：同じ、または似ている点は会話のときに感じることであり、どちらも同性の友人に対してなので繊細に行動する内容である。違っている点は、クラスター1はマイナスのイメージの項目もあるが、クラスター2はプラスのイメージしかない点である。同性の友人には親友的な友人とそれ以外の友人がおり、親友的な友人はクラスター2

に、それ以外の友人はクラスター1に含まれる。

クラスター1とクラスター3の比較：同じ、または似ている点はない。違っている点は、クラスター3はクラスター1と比べて重要度が低い。そもそもクラスター3は空間のイメージが強いことからクラスター1とは別物と考えたほうが正しいかもしれない。

クラスター2とクラスター3の比較：同じ、または似ている点はない。クラスター2と比べてクラスター3は重要度が低い。クラスター2はずっと続いていく関係であり、その場限りの関係ではないが、クラスター3は講義やサークル、昼食等をイメージしており、これらの時間や場所での関係は、そのときその場限りであるので違いがあると感じる。

被験者Bについての総合的解釈

クラスター1：「居場所があると感じるときは、会話に積極的に入ったり、場を盛り上げようとしたりする」「居場所がないと感じるときは、会話に入ろうとしなかったり、その場を立ち退こうとしたりする」「友人と一緒に居る時に、自分がわからない、興味があまりない話題が展開され続けると居場所がないと感じる」の項目は、被験者が友人との関係に居場所を感じるとき、または感じないときの行動や状況に関する内容になっている。趣味や会話の内容が合うとき居場所があると感じるという発言や、逆に興味のない会話が展開されると居場所がないと感じてその場を離れるという発言から、被験者は居場所に対してプラスのイメージとマイナスのイメージを持ち合わせていることがわかる。このことから「居場所の有無の条件、行動」と命名する。

クラスター2：「自分と考え方が似ている友人と話しているときに居場所があると感じる」の項目は被験者が最も重要視する項目と発言しており、イメージしている友人としてこれからも付き合っていくだろうと考えている同性の友人とのことであった。被験者が友人に対して居場所を感じる条件の一つとして被験者と考え方が似ていることがあげられる。また、クラスター2でイメージされる友人に対して居場所がないと感じることはないという発言からクラスター1でイメージされていた友人よりさらに親密度が高い親友的存在であると予想される。このことからクラスター2を「親友的な友人の条件」と命名する。

クラスター3：「友人と一緒に昼食を食べたり、講義を受けることがあると、居場所があると感じる」「途中から新しいサークルに入ったので、そこでは居場所があると感じることはなくもないが、長く一緒にいたわけではないので若干壁があるのではないかと感じる」と感じる項目は被験者が「空間のイメージが強い」という発言を行っている。これは、講義や昼食時間、サークル等で展開される知人や友人との関係についての内容であると考えられる。クラスター3が他のクラスターと比べて重要度が低いという発言からも、被験者はサークルや講義等のなかでの知人や友人との関係という空間に頼ったその場の関係を意味していると思われる。すなわち、クラスター1やクラスター2のような日常における会話や価値観の共有などを通して継続的な友人関係と比べると気軽な関係と認識していることが分かる。そこでクラス

ター3を「その場限りの友人関係」と命名する。

被験者Cについての事例

被験者CはD大学に所属する4年生で女性である。実験者とは面識があった。連想項目数は全部で7つで、重要順の上位3つは「いてくれてよかったと言われた時」「遊びに誘われる時」「ありがとうと言われた時」の3つだった。連想項目に対しては基本的にプラスのイメージが強かったが、0のイメージの項目もあった。

以下に被験者自身による構造の解釈を取り上げ、その後で総合的に解釈する。

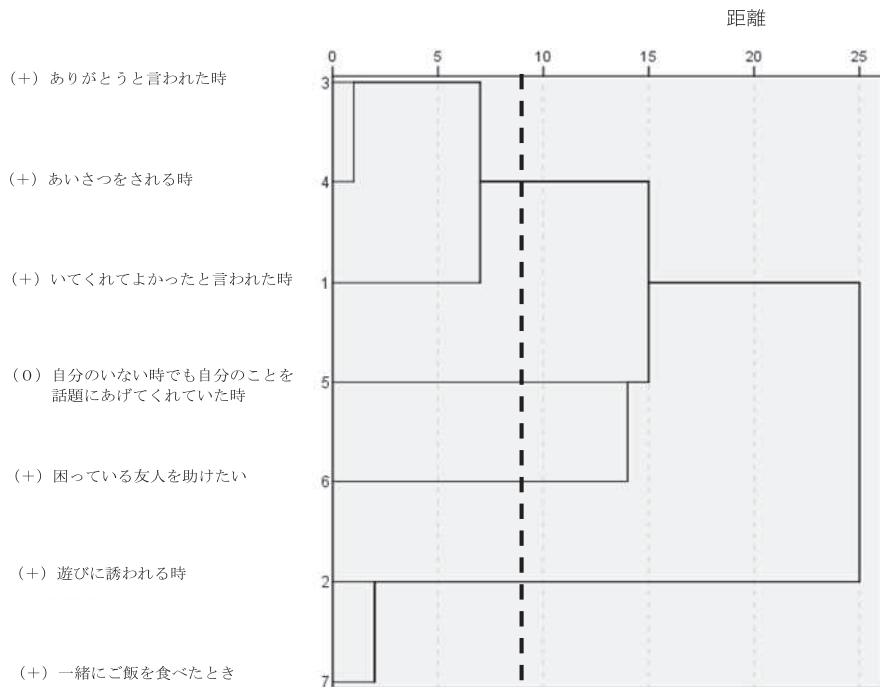


Figure 3 被験者Cの事例についてのデンドログラム

被験者Cによるクラスターごとの解釈

クラスター1は「ありがとうと言われた時」「あいさつをされる時」「いてくれてよかったと言われた時」の3項目：自分がいることを肯定してくれるというイメージです。イメージした友人の対象は同級生です。いてくれて良かったと言われる時というのは、友達と話してて考え方が似てる時や話が合う時などで言われます。話が合うというのは、価値観が合うというのに近いです。これはよく同性の友人に言われますね。異性の友人にいてくれて良かったと言われることはないです。名前をつけるとしたら「受容感」です。

クラスター2は「自分がいない時でも自分のことを話題にあげてくれていた時」の1項目：

自分がないところで自分の良いことについて話題にされていると、グループの中に自分の居場所があるんだなと感じることがある。悪いことについて話しているときは居場所は感じません。

クラスター3は「困っている友人を助けたい」の1項目：自分が行動したいことなので他のクラスターとは違うと思い、この項目のみにしました。友人が困っているときというのは、相談を受けたりするときとかですね。あとは、グループ内でいざこざあったときに助けを求められたときですね。

クラスター4は「遊びに誘われたとき」「一緒にご飯を食べたとき」の2項目：遊びに誘われてるっていうことは、一緒にいたいと思われているということだから居場所を感じるなと思います。特にこの人と遊びたいとかはなくて、女子の友達ならいつでも誰とでも遊びたいし、誘われたら嬉しいです。男子の友達も好きだけど一緒に遊びたいとは思いません。自分からも誘ったりはしないです。名前をつけるとしたら「必要とされている感」です。

補足質問①：「友人のなかで親友と呼べる存在はいるのか。」→友達が自分のことをどう思っているか気になる性格なので、親友だなと簡単に思えないっていう感じではあります。

クラスター同士の比較

クラスター1とクラスター2の比較：同じ点はどちらもそこにおいていいんだなと思うことです。そこというのは自分があるグループのことです。違う点は直接自分に向けて言われるというのと、間接的に聞くということで違いますね。

クラスター1とクラスター3の比較：同じところ、似てるところはあまりないですね。別に友人を助けることで私が受容感を抱くわけではないかなって思います。違いは自分がされることか、自分がしたいことかの違いですね。

クラスター1とクラスター4の比較：同じ点は、いていいんだなと思えることが同じです。違いはクラスター1は自分と一緒に何かしたいと思われることだけど、クラスター4はいたいと思われているみたいな、いてくれてありがとうみたいな感じです。

クラスター2とクラスター3の比較：同じ点はあまりないですね。違いは、ベクトルも違うし、内容も自分のいないときに自分の話題をされたからといって、「ああ、この人困ってるから助けよう」とは思いません。

クラスター2とクラスター4の比較：同じ点はされたときに嬉しく感じることです。違いはクラスター2は間接的なんですけど、クラスター4は直接的なところですよ。

クラスター3とクラスター4の比較：同じ点は困っている友人を助けたいってのは相談されるときに思うことだから、相談されること自体が必要とされてるという風につながると思うのでそこが同じかなと思います。違うのは、楽しいか楽しくないかですかね。相談されるときは真面目な状況だけど、遊びに誘われるときはやったーって嬉しくなります。

被験者 C についての総合的解釈

クラスター 1：「ありがとうと言われた時」「あいさつをされる時」「いてくれてよかったと言われた時」の項目は被験者の発言から、被験者が学内に所属する同性の友人に対して受容感を感じていることを示している。被験者自身が友人に対して行うことではなく、被験者が友人からされたときに居場所を感じる要因として捉えることもでき、被験者が友人関係において重要視しているものと考えられる。そこで、このクラスターは「同性友人からの受容感」と解釈する。

クラスター 2：「自分がない時でも自分のことを話題にあげてくれていた時」の項目は他のクラスターと比較しても特殊で、間接的に友人同士が自分の話題で会話をしていたときである。被験者は、友人の直接的な交流のなかに居場所を感じるだけでなく、被験者が不在のときの友人同士の会話のなかにも居場所を感じていると解釈することができる。友人同士の会話に被験者の話題が出て、友人から関心を持たれている、注目を浴びているという感覚を得ることにより、間接的に居場所を感じていると考えられる。そこで、このクラスターを「友人間における間接的な居場所」と命名する。

クラスター 3：「困っている友人を助けたい」の項目は被験者の連想した項目の中で唯一の被験者側からの行動である。困っている友人に対して相談に乗ったり、グループの友人から救いを求められたときに助けたいと思うという発言から、グループ内や友人との関係のなかで被験者にしかできない役割を感じているのではないかと考えられる。そこでクラスター 3 は「困っている友人に対する役割感」と命名する。

クラスター 4：「遊びに誘われたとき」「一緒にご飯を食べたとき」の項目は、被験者が同性の友人との日常生活における関わりについてイメージした項目である。異性の友人はクラスター 4 に含まれないことから、異性の友人と同性の友人は別と考えており、同性の友人との関係を重要視しているものと考えられる。同性の友人から遊びに誘われたり、食事をしたるときは嬉しいというプラスの感情が働くことから、同性の友人から必要とされている感覚が被験者の居場所感を促進しているものと予想される。これらのことからクラスター 4 を「同性友人との関わりにおける必要感」と命名する。

総合考察

本研究で取り上げた友人に対する心理的居場所感をテーマとした 3 事例は、本テーマの典型例として選び出したケースではなく、アットランダムに調査協力依頼をしたケースである。

最初の被験者 A の事例では、学内に所属する友人との関係における居場所に関してプラスのイメージを持っており、居場所を感じる要因として、本来の自分を受け入れてくれること、互いに目標に向かって協力して高め合えること、良好な信頼関係が築けていることが挙げられ、同性異性の偏りなく交友関係が築けているが、親友と呼べる友人は同性にしかいないこと

が分かった。

被験者Bの事例では、学内に所属する友人に対する居場所に関して、趣味や考え方、会話が合うと居心地が良いと感じるプラスのイメージと会話に入れないときや友人との間に壁を感じたとき居場所がないと感じるマイナスのイメージの両方を持ち合わせており、同性の友人をイメージしていることが示された。また、これからも関わっていくだろう友人かそうでない友人かで関わり方に差があり、同性の友人のなかでも親友的な友人にはプラスのイメージしかなく、それ以外の友人にはプラスとマイナスの両イメージを合わせ持つことが示唆された。

被験者Cの事例では、居場所に対して基本的にポジティブなイメージを持っていた。居場所がある友人として同性の友人をイメージすることが多く、異性の友人をイメージすることは少なかった。また、同性の友人からされて嬉しいことを異性の友人からされると違和感があることから、異性より同性の友人を重視する傾向があることが分かる。また、被験者の相手の内面を気にする性格上、親友と呼べる友人がいないことが示され、他の被験者と異なる点であった。

実験を通して、友人関係における居場所に対するイメージについてプラスのイメージとマイナスのイメージの両側面が見られた点は、居場所について肯定的な心理面だけでなく葛藤のある居場所と否定的な感情を併せ持つという小沢(1998)や小畑・伊藤(2001)の結果と同様な点が見られた。また、被験者Aの「ありのまままで話せる」や「なんでも話せる」という項目や被験者Bの「自分と考え方が似ている友人と話しているときに居場所があると感じる」という項目は、則定(2016)の心理的居場所感尺度の下位尺度に含まれる本来感(「〇〇と一緒にいると、ありのままの自分を表現できる」)に当てはまるものと考えられる。また、被験者Cの「困っている友人を助けたい」の項目は、困っている友人に対して自分にしかできない役割があるという感情が働いていると予想され、則定(2016)の心理的居場所感尺度の下位尺度に含まれる役割感(「〇〇から頼りにされている」)に当てはまるものと考えられる。これらのPAC分析を通して、心理的居場所感を構成する要素が友人関係に含まれていることが分かる。

上記の各事例のPAC分析の結果から、学内に所属する友人との関係における居場所と限定したために、同性の友人に対しての居場所と、異性の友人に対しての居場所に分けて発言している場面が目立った。そこで相手が同性、または異性の友人関係における居場所に対するイメージ、感じたとき取る態度、性別に関係なく友人関係における居場所に対するイメージ、または感じたとき取る態度に分けて考察する必要がある(Figure 4 参照)。同性、異性の友人との関係については信頼関係が構築されており、性別で居場所が分けられているわけではなかった。同性の友人との関係における居場所については、ありのまま話すことができる本来感の高い親友、考え方の異なる友人が含まれており、考え方の異なる友人に対してはマイナスのイメージを持つことも分かった。このことは、居場所を感じる場のなかで考え方の異なる友人との関係を柔軟に調整していることが窺える。また、異性の友人との関係における居場所については、関わる機会が少ないため、気を遣わずに済み、気楽であるという考え方や、逆に

気を遣うという考え方を持つことが分かった。同性の友人と異性の友人に共通して当てはまるイメージ、態度として、援助行動を取る、役割感を感じる、被受容感を感じる事が挙げられた。

同性の友人関係における居場所に対するイメージ、態度	性別に関係なく友人関係における居場所に対するイメージ、態度	異性の友人関係における居場所に対するイメージ、態度
<ul style="list-style-type: none"> ・本来感の高い親友 ・考え方の異なる友人 	<ul style="list-style-type: none"> ・援助行動を取る ・役割感を感じる ・被受容感を感じる ・信頼関係が築けている 	<ul style="list-style-type: none"> ・気楽 ・気を遣うときがある

Figure 4 友人関係における居場所に対するイメージ、態度

学内の友人に対して居場所を感じる要因としてまず、同性の友人をイメージすることが挙げられる。上記の3人の事例を見ても自由連想した際に同性の友人をイメージしていることが多く、中には異性の友人に親友と呼べる友人がいないこと、同性の友人にされて嬉しいことが異性の友人にされて嬉しいとは限らないことなど、同性の友人と比べて異性の友人に対して距離を置いているとみられる発言もあった。しかしながら、これは異性の友人に対して否定的な感情を抱いているわけではないと思われる。異性との関係については、友人関係だけでなく恋愛関係という要因も少なからず関わってくる。本研究では、被験者に対して恋愛に関わる質問、例えば恋人の有無や、大学生活における恋人の重要性等について調査していないため、主に同性の友人との関わりについての発言が多く見られたのではないかと考えられる。

また、被験者Aはクラスター同士を比較した際、「お互いに信頼しあっている」という共通点が見いだされている。また、被験者Bや被験者Cにおいても同性の友人との関係の中で気が楽であると捉えていたり、困っている友人を助けたいと感じており、そう思うことができる関係の裏には信頼関係が構築されているのではないかと考えられる。このことから、居場所を感じる要因の1つとして、良好な信頼関係が築けていることが挙げられよう。

一方、居場所感の阻害要因としては、友人と共有できる情報や体験の有無（差異）が考えられる。被験者Bの事例を見ると、途中からサークルに入ったことによりサークル内の友人との間に壁を感じるという発言があった。入学してすぐにサークルに入った友人たちは被験者Bとは異なる様々な活動を共にしてきており、サークル内での思い出も異なるであろう。被験者Bは、自身がサークルに所属する前の情報や体験を友人たちと共有できておらず、友人間で被験者Bの持ち得ないサークル内の情報や思い出についての会話が行われることにより、居場所感が阻害されているのではないかと予想される。

今後の課題として、本研究はPAC分析を通して大学生の居場所を規定する要因について検討したが、3人の被験者が現在、大学生活に適應しているか否かで大学生活における友人関係や居場所についての考察が変わる可能性があるかと予想される。したがって、大学生活における適應感について併せて調査することで、被験者の適應感について統制することが必要である

う。また、PAC分析の特徴上、被験者の友人に対する居場所を規定する要因が大学生に普遍的にみられる友人に対する居場所の規定要因とまでは言及できない。このことから、本研究で得られた居場所の規定要因が多くの大学生を通して見られるものなのか量的研究を行う必要がある。

引用文献

- 小沢一仁 (1998) . 青年の居場所から見たアイデンティティ 日本青年心理学会大会発表論文集 6, 32-33.
- 北山修 (1993) . 自分と居場所 岩崎学術出版社
- 小畑豊美・伊藤義美 (2001) . 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類— 情報文化研究, 14, 59-73.
- 迫田一城・今林俊一 (2017) . 大学生活における学校適応感に関する研究—心理的居場所感と大学生生活ストレスの及ぼす影響— 九州心理学会第78回大会発表論文集, 32.
- 富永幹人・北山修 (2003) . 青年期と「居場所」 住田正樹・南博文 (編) 子どもたちの「居場所」と対人的世界の現在 (pp. 381-383) 九州大学出版会
- 内藤哲雄 (1993) . 個人別態度構造の分析について 信州大学人文学部, 人文科学論文集, 27, 43-69.
- 中藤信哉 (2011) . 青年期における居場所についての研究 京都大学大学院教育学研究科紀要, 57, 153-165.
- 則定百合子 (2016) . 青年期における心理的居場所感の構造と機能に関する研究 風間書房

付記

実験を行うに当たって、被験者のプライバシーの保護を最優先とし、実験の中止や一部の回答の拒否、録音の中止ができることを前もって伝え、さらに事例報告することについて被験者の承諾を得て実験を行った。ご協力いただいたD大学の学生3人の皆様に深く感謝申し上げます。